

多摩川における空間利用と景観構成の歴史的変遷の実態調査とパターン分析

埼玉大学大学院 学生会員 中谷英俊
八王子市役所 正会員 小谷田隆芳
埼玉大学 正会員 窪田陽一

1. 研究の目的

多摩川は、東京の西部を流れ都市空間と密接な関わりを持っている。また歴史的にみても江戸時代の玉川上水や二ヶ領用水、第二次大戦後の小河内ダムなど、技術史的に注目すべき河川整備が見受けられる。多摩川流域の歴史は、江戸・東京の歴史の縮図とも言え、また同時にこの川とその流域の特性は、多かれ少なかれ日本各地の流域がもつ特性を共有している。第二次大戦後は、戦後復興、高度成長に伴う都市化、環境問題などの影響を受けながら、多摩川は急速に変貌を遂げた。その景観的変遷に考証を加え記録として残すことは今後の整備のあり方を考え、住民と河川の親しい関係を構築する上で意義があると思われる。そこで本研究は、多摩川の空間利用と景観構成の変遷過程を明らかにし、パターン分析を行った。

2. 研究の方法

現在橋梁がかけられている地点には、多くは江戸時代に渡しという舟の行き来があり、交通の要所であった。人々に頻繁に使われ親しまれたこのような交通施設はその場所の様子を伝える資料も多く、多摩川の景観変遷を追う上で有益である。特に、橋梁の建設、架け替えという出来事は外観上は流軸の景観を阻害するが、橋の上からの視点場ができるなど、景観に与えるインパクトが大きく景観の変遷を把握する上で重要であると考えられる。したがって本研究は、線的に長大な河川空間の節目としてその景観を代表する橋の周辺

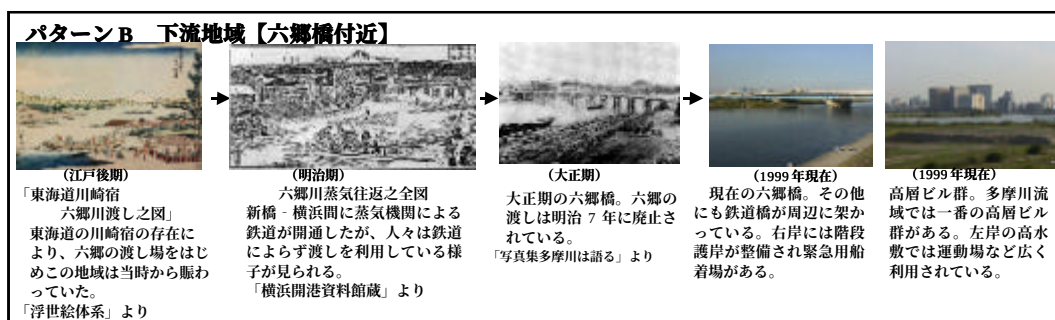


図1 景観変遷パターン（下流地域の例、パターンB、六郷橋付近）

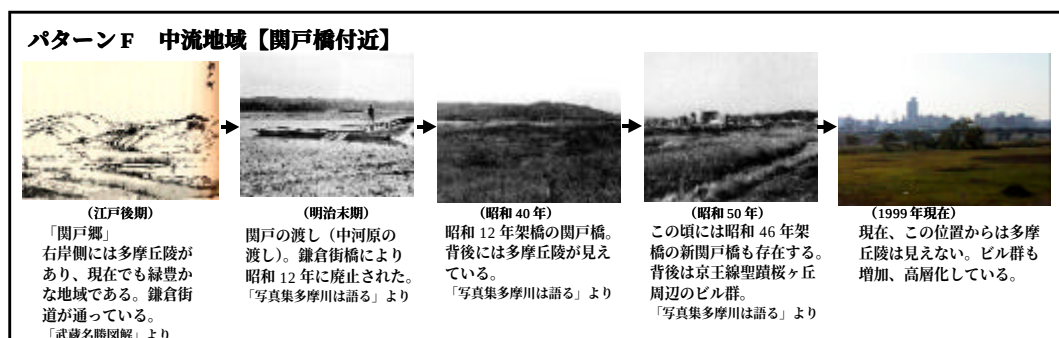


図2 景観変遷パターン（中流地域の例、パターンF、関戸橋付近）

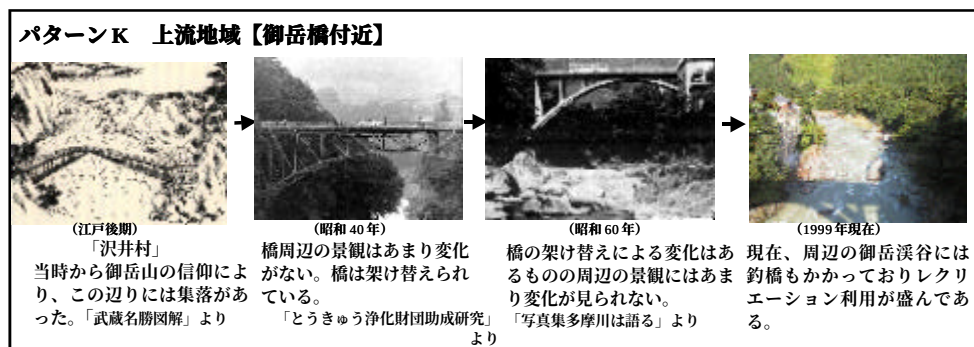


図3 景観変遷パターン（上流地域の例、パターンK、御岳橋付近）

キーワード：土木史、河川景観、多摩川

〒338-8570 埼玉県浦和市下大久保 255 TEL: 048-858-9549 FAX: 048-858-7374

地域に着目した。調査方法は、現地における実態調査と浮世絵（154 点）古写真（459 点）及び文献などに関する資料調査を行ない、それらの情報と地形図や古地図からわかる位置や地形と整合しているかどうか確認を行った。浮世絵・古写真を使った調査では原風景の構造の把握を行った。また、この調査では人の行動も水際の景観の要因として重視している。次に、多摩川を様々な要素を踏まえて 23 地域に分類し、それぞれの変遷過程を明らかにした。それらを比較検討する中から多摩川としての代表的な変遷パターンを抽出した。調査範囲は、上流は御岳橋付近、下流は河口までである。

3.結果と考察

多摩川の景観変遷を特徴づける要因には、渡し舟から橋梁への移行、橋梁の架橋、架け替え、高層建築物の建設などがある。特に興味深いのは都市化による住宅地の増加である。(図 2：1999 年現在の写真参照)これらは、増加する可能性が高く、かつ河川景観に与えるインパクトも大きいので、河川空間のランドマークとして位置づけるのか、また自然景観への影響を重視するのかを考える必要があると思われる。多摩川周辺には古くから東海道や甲州街道、奥多摩街道など重要な街道が多く存在する。街道沿線には必然的に民家が広がり、それらは多摩川独自の景観的特徴となっている。以上のことを考慮すると、表 1 のように多摩川の代表的な景観の変遷を 11 パターン抽出する事ができる。江戸時代以降の浮世絵などを用いて実施した現在の景観との比較であるが、下流域は図 1 のパターン B のように、高層建築物群が建ち並び、浮世絵に描かれていたような河川原風景失われてしまっている。中流域もパターン F のように、高層ビルなどが建ち並んだことによって、かつて背景に山がみえたところがそうでなくなっている地域もある。また、上流域は、図 3 のパターン K のように、背景の山、地形などを中心に原風景を残しているものが多いといえる。このように多摩川では伝統的河川景観から現代的景観に至るまで多様な景観変遷を見出すことができる。

4.結論

近年の流域の都市化に伴って、多摩川は、市民が身近な自然と接する場として、あるいは、都市のオープンスペース、多くの歴史や文化を伝える場としても重要な空間となっている。本研究の調査で示された景観変遷の中には多摩川の「多摩川らしさ」を形成している要素が見受けられるが、それらを維持し、後世に残せるような河川計画、整備のあり方を考える必要がある。その為には多摩川流域の住民の意識や社会背景、自然条件を、多摩川の個性として現代の人々がよく知ることが重要である。これらの風景資源を流域のみならず多摩川を訪れる多くの人々の共有財産として認識することが、河川景観を損なう極端な開発を抑制する原動力となるであろう。

表 1 変遷パターン

パターン	地域	原風景	江戸時代	明治時代	昭和初期	昭和20～30年代	昭和40～50年代	昭和60年以降	現在
A	河口付近	遠景に山	遠景に山	築堤	S7～S20工場がでし始める	S20～S41埋立 始まる	住宅地飽和状態	高水敷整備良好	空港・工業地帯
	大師橋付近								
B	六郷橋付近	遠景に山	遠景に山	築堤	S7～S20住宅が急増する	S35～S41住宅地飽和状態	高水敷整備良好	高層ビル・住宅密集地域	
	多摩川大橋付近								
C	二子橋付近	遠景に山	遠景に山	築堤	S7～S20田圃調布付近まで 住宅密集	S22～S41住宅 増加	S47～S51住宅増加		住宅密集地
	宿原原堤付近	中景に山	中景に山	築堤	景観に関わる変化なし	S35～S41住宅 急増	S43～S47住宅 増加	高水敷整備良好	団地・住宅密集地域
E	京王相模原線橋梁付近	中景に山	中景に山	築堤	景観に関わる変化なし	S35～S41住宅 急増	S43～S47住宅 増加	高水敷整備良好	住宅密集地
	多摩川原橋付近								
F	是政橋付近	近景に山	近景に山	築堤	景観に関わる変化なし	S24～S29住宅 急増	S29～S41住宅 増加	S44～S46 ニュータウン 激増	住宅密集地
	関戸橋付近								
G	日野橋付近	近景に山	近景に山	築堤	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	S32～S41住宅 激増	S43～S45住宅 増加	緑地広大
	中央線橋梁付近								住宅密集地
H	多摩大橋付近	近景に山	近景に山	築堤	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	S32～S41住宅 激増	S43～S45住宅 増加	住宅地
	多摩大橋付近								
I	拝島橋付近	近景に山	近景に山	築堤	S12～S24住宅増加始まる	S32～S41住宅 激増	景観に関わる変化なし	緑地広大	住宅地
	陸橋付近								
J	羽村堤付近	近景に山	近景に山	築堤	S12～S24住宅増加始まる	S32～S41住宅 激増	景観に関わる変化なし	緑地広大	住宅地
	多摩川橋付近								
K	万年橋付近	渓谷	渓谷	無堤	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	S33～S41住宅 増加	S51～S54住宅 増加	景観に関わる変化なし
	神代橋付近								
K	御岳橋付近	渓谷	渓谷	無堤	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	景観に関わる変化なし	渓谷
	御岳橋付近								

出典・主要参考文献
写真集 多摩川は語る：東京ライオンズクラブ「写真集 多摩川は語る」編集委員会
武蔵名勝図会：慶友社、浮世絵体系：集英社
橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究：石井作平：とうきゅう浄化財団助成研究：1981